

2. 0～2歳児の母親の孤立化を防ぐための親子交流の活性化

【市民意向調査等からみた現状と課題】

- 0～2歳児の約8割は在宅で子育て …………… p.25
- 子育ての不安・負担の現状 …………… p.26
- 子育ての仲間や手助け者の状況 …………… p.28
- 親子で集える場を要望 …………… p.29

【取り組みの方向性】

- 求められる親同士の交流 …………… p.31
- 親子の「出会い」の場・仲間づくりと自主活動への支援 …………… p.31
- 子育てひろばポップコーン事業のあり方の検討 …………… p.32
- 地域住民と新住民の接点をつくる …………… p.32

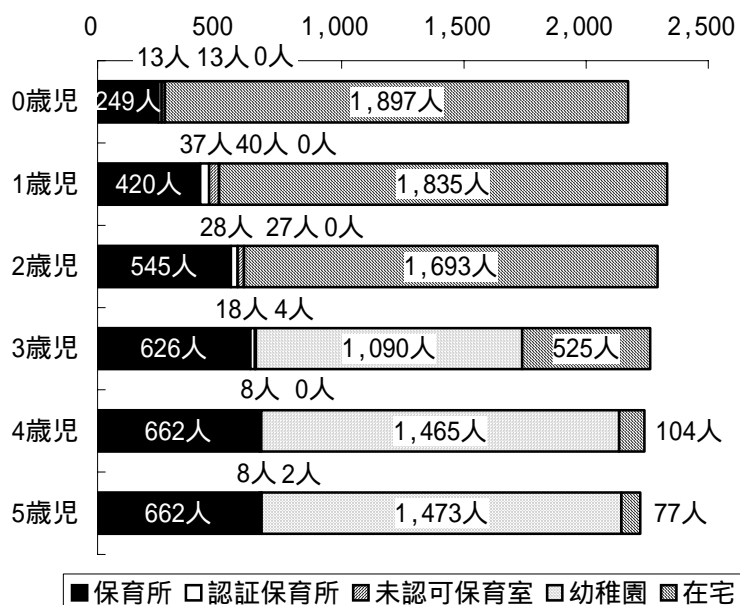
【市民意向調査等からみた現状と課題】

0～2歳児の約8割は在宅で子育て

3歳以上になると多くの子どもが保育所か幼稚園のいずれかに通っていますが、0～2歳児では在宅で育てられている場合が少なくありません(図表25)。

平成16年4月1日現在、0～2歳児は全体で6,797人ですが、うち保育サービスを利用しているのは市が把握している限りで1,372人(保育所1,214人、認証保育所78人、未認可保育室80人)と約2割になっています。0～2歳児の約8割は在宅で育てられていることとなります(図表25)。

図表25 子どもの保育場所(年齢別)



子育ての不安・負担の現状

市民意向調査の結果では、「子育てが辛い」、「子育てに自信が持てなくなる」、「子育てが嫌になる」などの子育ての不安・負担感を約1割が少なからず感じている状況が明らかになっています(図表 26～図表 29)。

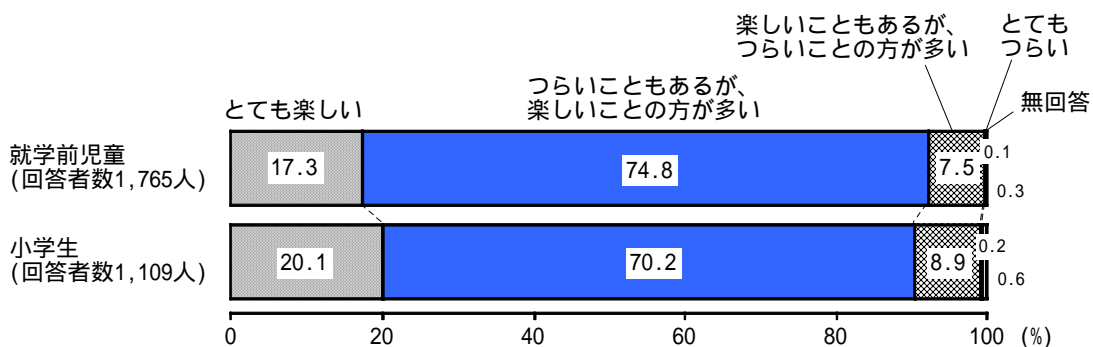
「子どもをたたいてしまうこと」についても、約1割が「よくある」若しくは「ときどきある」としており、子育ての負担ゆえに身体的暴力をふるってしまう状況が少なからずあるようです(図表 30)。

子育て意識の小項目間の関連性を分析したところ、例えば子育てが「辛い」と感じている回答者は、同時に子育てに「自信が持てない」、「子どもを嫌になることがある」、「たたいてしまう」と感じている場合が多いことがわかりました。さらに、こういった子育ての不安・負担感を持つ世帯の属性について分析したところ、「ひとり親世帯」や、「子どもの年齢が0～2歳」で、保護者が「無職・家事専従・学生」として在宅で子育てをしている「核家族世帯」(=二世帯世帯)に、子育ての負担感を訴える割合が高いことがわかりました。

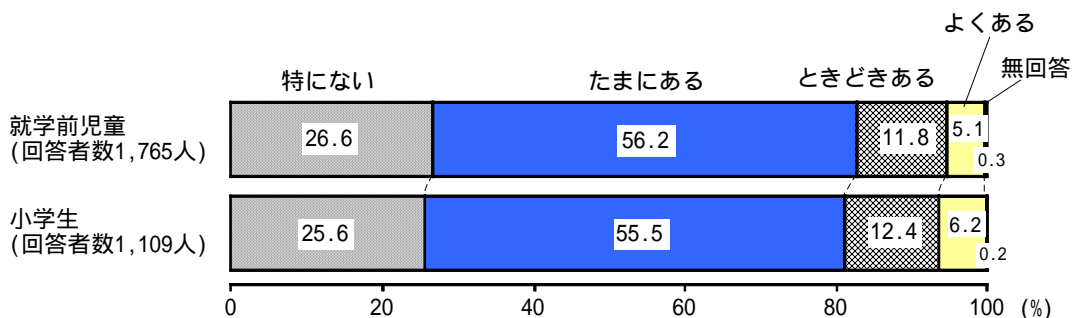
また、市民意向調査に回答を寄せた世帯を見ると、就学前児童のいる世帯の88.5%が核家族世帯(「両親と子」または「ひとり親」の世帯)であり、また、就学前児童がいる世帯の62.5%の子ども数は1人といわゆる「ひとりっ子」の世帯でした。加えて、子どもの世話を頼める親族・知人や仲間の有無、夫婦間のコミュニケーションや配偶者の子育て協力の度合いが子育ての不安・負担感に影響を与えているとの結果も得られています(図表 29)。

これらのことから、在宅で子どもを育てている場合、家庭の中では母親と1人の子どもだけが向かい合い、孤立している可能性が考えられます。都市化や核家族化の中で多くの家庭が少なからず子育てについて不安や負担を抱えていると考えられますが、周囲の支援によってそれが軽減されることがわかります。

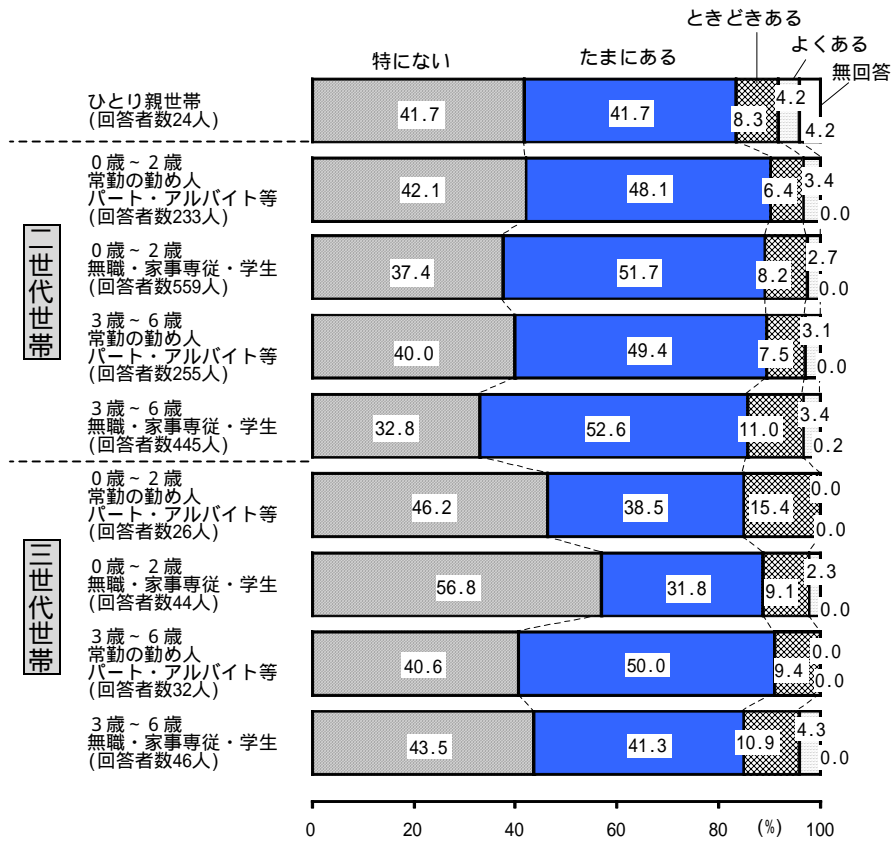
図表 26 子育てについて



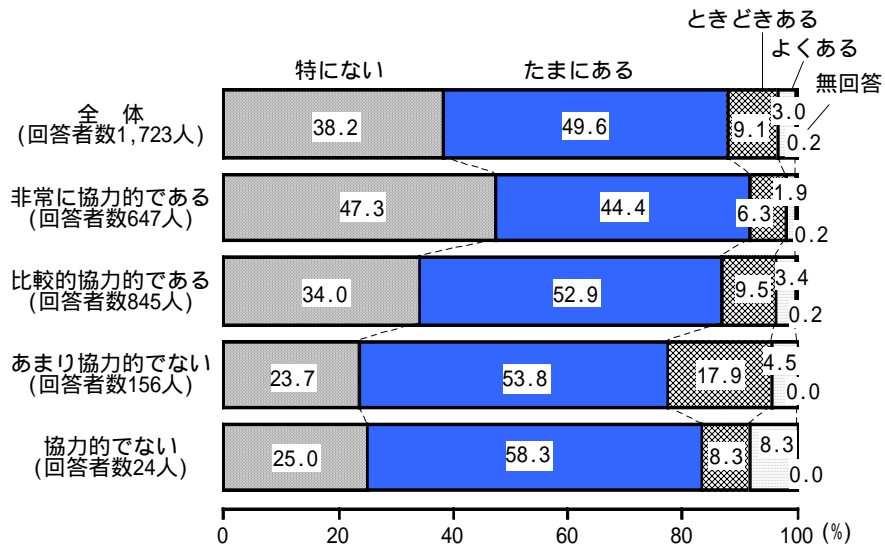
図表 27 子育てに自信が持てなくなること



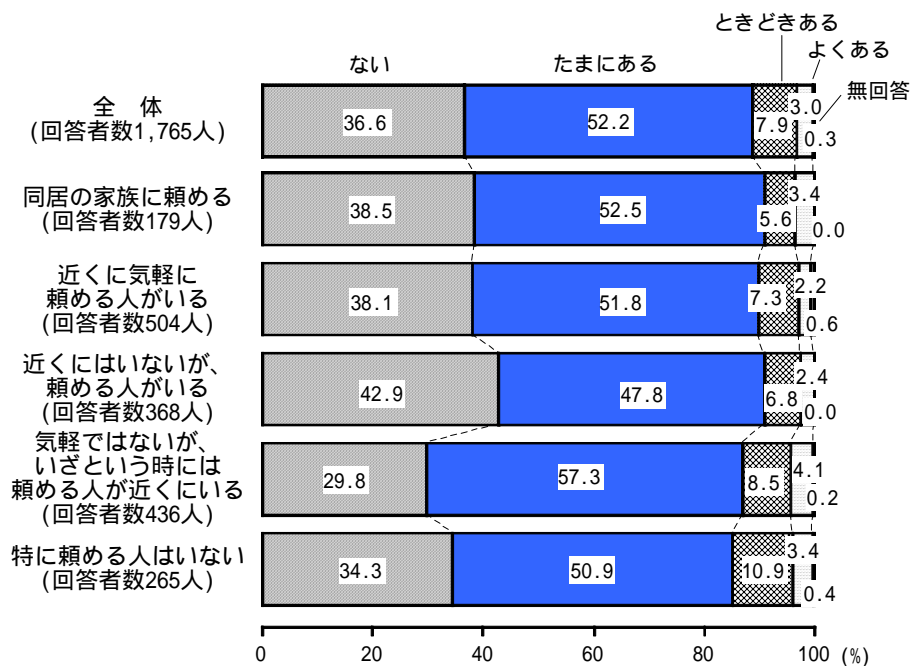
図表 28 子育てが嫌になること(世帯類型別、子どもの年齢別、就労状況別)



図表 29 子育てが嫌になること(配偶者の子育てへのかかわり別)



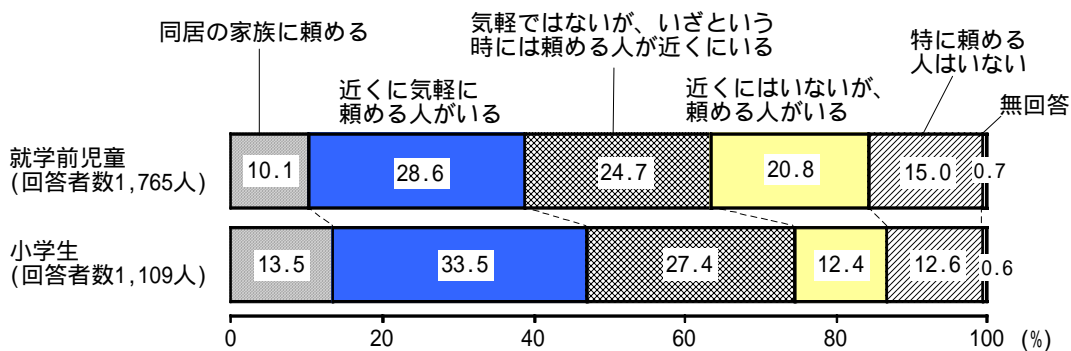
図表 30 子どもをたたいてしまうこと(世話を頼める親族や友人・知人の有無別)



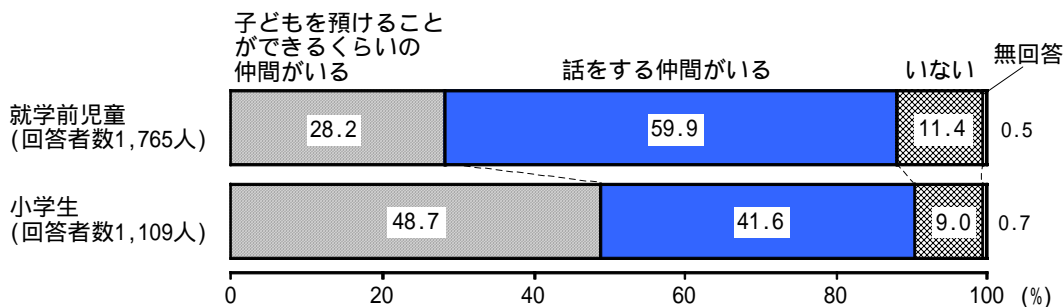
子育ての仲間や手助け者の状況

市民意向調査の結果では、就学前児童の保護者の15.0%、小学生の保護者の12.6%が「特に頼める人はいない」となっており、子育て家庭の「孤立」がみられています(図表 31)。子育て仲間についても、就学前児童の保護者では、話をする程度の仲間はあるが深い付き合いをする仲間が少なく、11.4%が「仲間がいない」としています(図表 32)。就学前児童の保護者で子育てサークルに参加している人は約2割でしたが、参加していない場合もサークルに関心はあるようです。サークルに参加していない理由の第3位に「サークルに関する情報がないから」が挙げられているなど、情報があれば参加したいという意向があります(図表 33 及び図表 34)。保育所や幼稚園に通っていない低年齢児を抱える保護者の間で子育て仲間が不足している傾向がみられますが、子育てサークル等への関心も高く、きっかけさえあれば参加したいと考えている人も多いといえます。

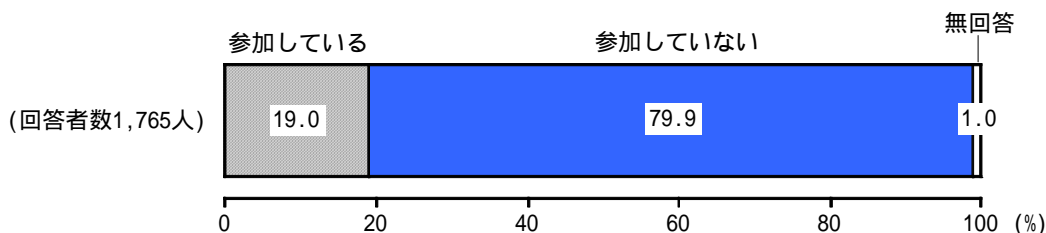
図表 31 子どもの世話を頼める親族や友人・知人の有無



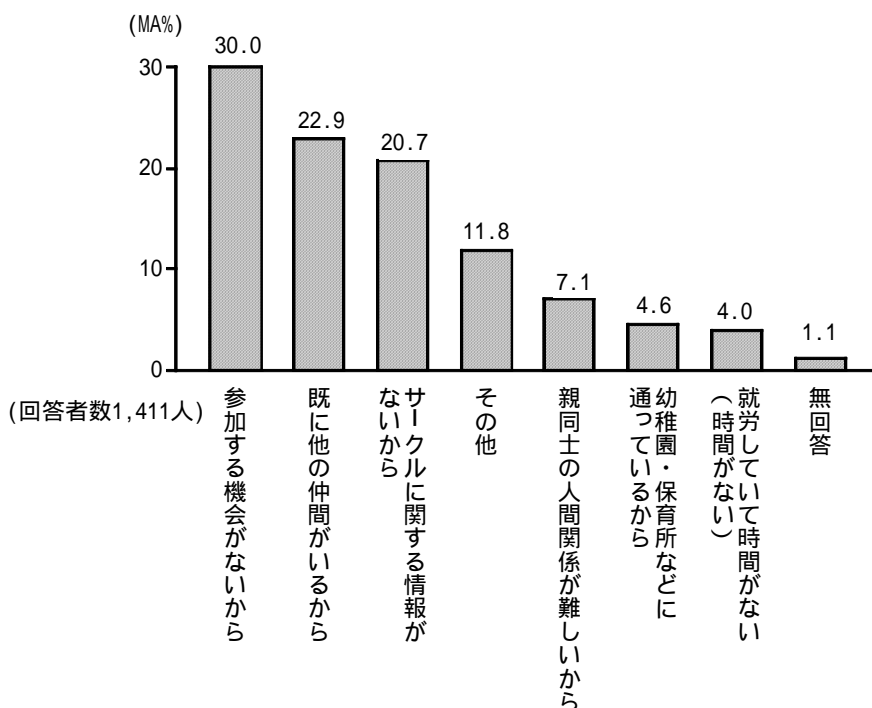
図表 32 子育て仲間の有無



図表 33 子育てサークルへの参加状況(就学前児童)



図表 34 子育てサークルに参加していない理由(就学前児童)



注. MA%: 回答選択肢の中からあてはまるものをすべて選択する場合

親子で集える場を要望

幼稚園や保育所に入る前の3歳未満児を持つ保護者で、特に核家族で在宅で育てている場合に、子育ての不安や負担が大きくなる傾向があります。これは、家庭内で親が子どもとだけ向かい合っていて、話し相手がおらず、リフレッシュする機会がないなどの状況の中で生じていると考えられます。

また、子どもの接し方に自信のない人が多いことが市民意向調査の結果でもみられます。これは、子育てのモデルとなる人が周りにおらず、自分の子育てについて他の人から助言をも

らったり親同士で情報交換したりできる環境がないためではないかと考えられます。

子育て中の保護者については、最近は転入者も多いため地域の中で知り合いもあまりいない場合が多く、加えて子どもが小さいために行動範囲が狭まり、ますますコミュニケーションの機会がなくなっている傾向があると考えられます。

新たに府中市に転入してくるなどして地域の状況がわからず、幼い乳児を抱えている保護者の場合には、出かけていって見知らぬ人と自発的に関係づくりをはじめるということは労力を伴うものです。また、仲間づくりや関係づくりの方法がわからないといった親も少なくないと推察されます。

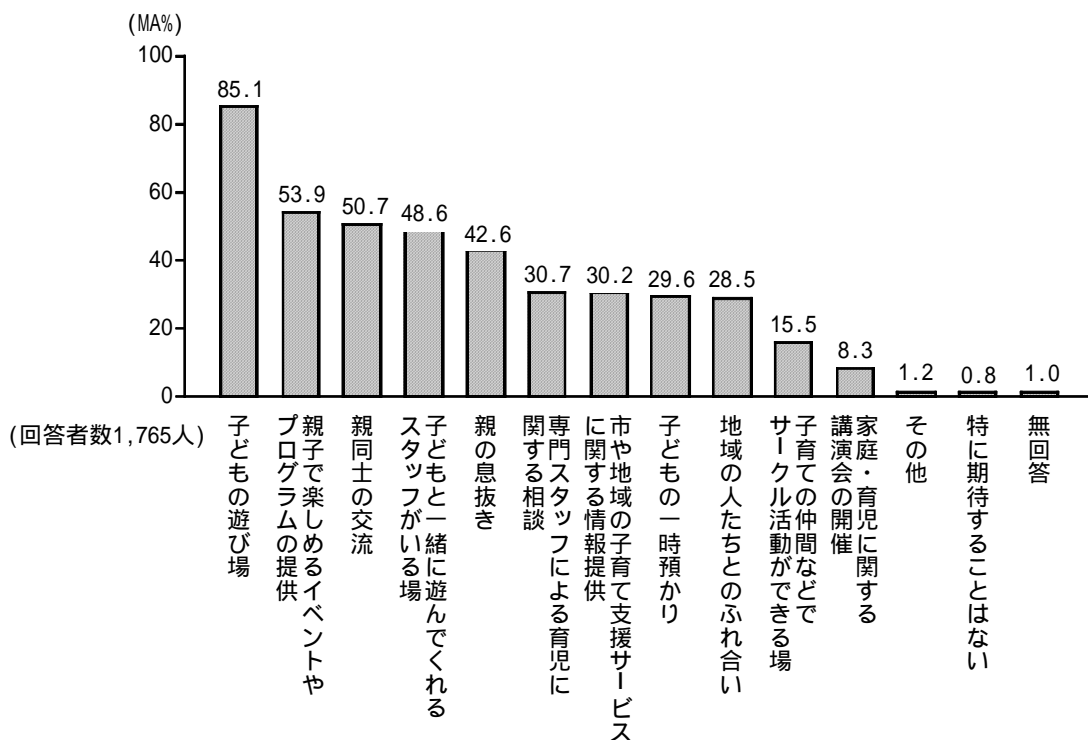
そのような中、親子交流の場といっても、単に場所だけを設けるのでは既に関係ができている仲間同士のたまり場になってしまい、他の親子が入りにくいことになると考えられます。

市民意向調査で「親子で集える場についての希望」を尋ねたところ、「子どもの遊び場」を基本としながらも、「親同士の交流」やリフレッシュへの支援、さらには相談・情報提供など複合的な機能を持つことが期待されています(図表 35)。

市民意向調査の自由回答においても、子どもの遊び場、親子の集える場に関する要望・意見が寄せられています。特に就園までの期間において親子が遊び、交流、仲間づくりができる場を要望する意見がみられます。

府中市では、文化センター内の「児童館」、子ども家庭支援センター「しらとり」の「オープンルーム」、「子育てひろばポップコーン」、私立保育園の「子育てひろば」などの事業が展開されています。しかしながら、市民意向調査によると、これら事業の認知度が十分ではなく、また、開催回数、施設設備、スタッフやプログラムなどについての充実してほしいとの要望も示されています。

図表 35 親子で集える場に期待すること(就学前児童)



注. MA%: 回答選択肢の中からあてはまるものをすべて選択する場合

【取組の方向性】

求められる親同士の交流

市民意向調査の自由意見においても、親が息抜きや情報交換をしたり、子どもと一緒に遊ばせたりできる場を求める意見がみられます。そういった親子交流の機会を積極的につくっていく必要があると考えます。

親子の「出会い」の場・仲間づくりと自主活動への支援

まずは、親子交流の入り口として、誰でも入りやすく、親同士の関係づくりのしかけがある「出会い」の場を身近な地域に設けていくことが重要であると考えます。

それには、幼稚園や学校、学童クラブ施設、文化センター、自治会の公会堂や集会所等の既存の施設を活用して、親子が自主的な活動において利用できる「場」を様々な地域で設けていくことが重要です。既存の施設の利用規約等を弾力化し、使いやすくする工夫が求められます。

次に、先に挙げた「出会い」の場などを通じて知り合った親子が、仲間となり自主的な活動に移行できるように支援していくことが重要です。

こういった「出会い」を意図的に創り出す場をうまく運営していくためには、プログラムの内容を充実させるとともに、そのプログラムをうまく実施できる人材が不可欠であると考えます。親子の「出会い」の場の中でプログラムの企画や実施を担う人材を、新たな子ども家庭支援センター（中核施設）が中心となって育成していくことが必要であると考えます。

また、地域で活動している自主サークルや地域に既にある交流活動等に関する情報を収集し、子育て家庭に提供するなどの取組も求められます。

参考意見

(A委員)

地域の「子育てサロン」（個人的に実施されているものを含む。）の発掘、紹介、育成
個人の自宅の開放、商店街の一角、喫茶店の開放なども含めた「交流の場」の設定、及び子育て仲間を育成する人材の養成

(E委員)

商店街空き店舗利用、自宅開放、自治会館などを利用し、地域住民とも交流できる場を生活に密着した場所に広げる。

(J委員)

既存の母親学級のほか、0歳児の母親が集う場として、できれば妊娠中からの参加や有職者の産前休暇中の参加を可能にする。親子のスキンシップの重要性を説きながら、先輩ママ達との交流の場としても活用する。歩いて参加できるよう市内随所で開催し、適切なプログラムを考え、指導できる指導員が必要。毎回ではないが、子育て相談に応じられる保健師や栄養士の専門家も配置。

幼児期に同年代の子どもたちが一緒に遊べる場が必要。遊びの提案ができる指導員と弟妹を連れてくる場合のための乳児保育のできる人が必要。

雨天、炎天下の時の遊び場として屋内施設が必要。乳児のためにはじゅうたんや畳等の設備があって、清掃・修理を欠かさない。幼児に対応するためには、ダイナミックに体を動かせる大型遊具の配置が望ましい。できれば常任の指導員を配置し、駐車場スペースを設ける。

参考意見（続き）

（I委員）

親子交流の場を運営する人材については、幅広い年齢層で、有資格者は有償とするなどして、人材の軸をつくる。

生活状況に合わせて活動できるシステムとして、子育て中に利用した人が子どもの手が離れたら今度はスタッフとして活動できるような、人材の循環ができればよい。

市内のあらゆる施設や商店街の空き店舗などにおいて交流の場が開催できないか検討する。

外遊びの好きな子どもも多いので、屋外で交流できる場をつくれないうか、既存の屋外施設の活用を視野に入れて検討する。

屋内外とも、地域資源の見直し、発掘をしっかりと行う。

子育てひろばポップコーン事業のあり方の検討

府中市では、親子の孤立を防ぐことをねらいとして、誰もが入りやすい親子の出会いの機会として「子育てひろばポップコーン事業」を実施しています。しかし同事業については、開催地が限定され、活動回数も限られているといった点が指摘されています。また、現在は市職員とボランティアによって運営されていますが、求められる内容も様々となり、ボランティアにとっては気軽とはいえなくなっています。今後、この子育てひろばポップコーン事業のような親子の出会いの機会を提供する事業を広く市全域で整備していくことが望まれますが、場所と人員の確保も含めて、運営体制の充実を図っていく必要があると考えます。

子育てひろばポップコーン事業の拡大や運営のあり方の具体的な事柄については、現に活動しているボランティアの意見を広く聴取し、参加者の感想や意見、参加実態も分析するなどして、別途議論する機会を設けるべきであると考えます。

また、平成 17 年 3 月に開設する予定の新たな子ども家庭支援センター（中核施設）では、毎日利用可能な「ひろば事業」を実施していく予定となっています。このひろば事業についても、どのような体制及び内容で行っていくのかについて、具体的に詰めていくことが緊急の課題といえます。

参考意見

（A委員）

学童クラブの日中の時間を使った「ポップコーン事業」の小学校区単位での整備

（I委員）

ひろば事業は、中核施設と各地域の公的機関を利用してできる限り多く開催する。

地域住民と「新住民」の接点をつくる

府中市の子育て世帯の中には、他の地域から転入してきたいわゆる「新住民」が少なくありません。「新住民」はともすれば地域の人々とのつながりがなく、孤立してしまいがちです。

現状では、「新住民」は地域ではなくサークルなどに交流を求め、結果として地域とのつながりがなかなかできないといった状況があると考えられます。

「新住民」も地域の中で必要な手助けや見守りを得ながら子どもを育てていけるように、地域住民と「新住民」が互いに知り合い、交流するような「接点」を考えるべきです。伝統的行事や文化継承などを「新住民」との接点として有効に利用するなどの取組を、地域主体で検討していく必要があると考えます。

市民意向調査の自由回答の記述(抜粋・要約):子育ての孤立や親子の交流、仲間づくり

子どもを育てるのは楽しいこともあるが、やはり我慢することも多く、特に1日中相手をする母親はともストレスがたまる。母親にも新しいものに触れる余裕を与えてほしい。

子どもと2人きりで家にいると社会に取り残された感じ。授乳、おむつ、夜泣きで自分も日中眠くイライラ。まったく同じ事の繰り返し、話し相手もなし。ゆっくり買い物をしたく、子どもを連れていっても大声で泣かれすぐ帰る始末。そんな時ママ友達と話をすると精神的に楽になった。

子どもが生まれてからゆっくりと友達とお茶することもできず、外でもぐずらないか心配、育児のストレスや話したいことは山ほど。子どもが泣いてもお互いさまでいられる環境で、仲間とお茶などできる場がほしい。

特に赤ちゃんのとき、孤立していて、すべて自分だけでやっていた辛かった。

心にゆとりがあるときは子育ては楽しいが、ゆとりがなくなる時、主に「お金がない」「時間はない」「ストレスの吐き出し口がない」時はつらい。

子育てで孤立を感じている人が周りにたくさんいる。

四六時中子どもと一緒にいると気が変になりそうだった。人間は一人になる時間が絶対に必要。母親の自由な時間のために3,4時間預かるシステムがあってほしい。

子育て支援の中核施設をつくってほしい(調布の「すこやか」のようなもの)。新たにできる駅前の施設の内容に期待する。

駅前施設を中核にして、地域ごとには小さな子どもと親が集える場を設けて、地域ごとに小さな子育て支援のネットワークができてほしい。

母と子の交流の場をつくってほしい。特に未就園児の集う機会が少ない。

行きたいときにいつでも遊びに行ける施設があればよい。

親子が楽しめたり、親子のふれあいを大切にしながら、親が息抜きできる場はほしい。

子どもと遊んでくれるスタッフがいてほしい。

ベビーカーや徒歩で行くことができる距離でないと行く気にならない。

子どもは保育してもらい、親は子育てについて学習できる場があると、親の息抜きにもなる。

親子で食事(持ち込みも)ができ、子どもを遊ばせて、親同士がリラックスして情報交換できる場を増やしてほしい。

ひろば等での集まりの際に、身体計測や育児相談の場が設けられるとうれしい。

土日に働いている母親も含めて交流できる機会がほしい。

親同士の仲間づくりができる機会が身近にほしい。

転居してきた際、サークルの情報が得にくかった。また、途中からは参加できなかった。

既存のサークルは既に人間関係が出来上がっていて参加しづらい。

文化センターのサークルは、職員の関与が少なく、参加する母親自身が保育者にならないといけなないので、母親の負担が大きく気軽に参加できない。

育児サークルに限定するのではなく、自分の好きなことに通じて仲間づくりできる機会がほしい。

歩けるようになるまで親子が遊べ、仲間づくりができる場がない。

働く母親が休日にも仲間づくりができる機会がほしい。

サークルで知り合った友人と一緒に幼稚園等に上がり、親も子ども精神的不安を持たずに済んだ。